

## プルーデンス監督の形成 —大蔵省銀行検査を中心に—

横浜国立大学 <sup>ほとり</sup> 邊 英治

明治維新以降、日本経済は機械制大工業が勃興し、西欧へのキャッチアップが進み始めた。金融面では、銀行制度等の近代的金融制度が導入され、広範な民衆の資金を集約するとともに信用創造機能も活用して、大口化する工業化資金の供給が図られた。しかしながら、預金者の拡散（小口化）と資金需要の大口化というギャップの拡大は、信用創造に伴う銀行間関係の深化とあいまって、金融の不安定性に帰結することとなった。

明治政府がこの点をどの程度想定していたかは必ずしも明らかではないが、国立銀行制度では、当初から銀行監督・検査が行われていた。そして、明治期以来の銀行監督・検査は、幾度かの金融危機を経る中で、両大戦間期にはプルーデンス監督へと発展していく。

本報告では、日本経済や銀行業の近代化との関係に留意しつつ、戦前期の大蔵省銀行検査がプルーデンス監督の中心として進化していく過程を、できる限り一次史料に即して明らかにしていく。具体的には、①西南戦争～松方デフレ期、②日露戦後不況～第一次世界大戦期、③1920年反動恐慌～昭和恐慌期、という3つの時期をとりあげる。これらの時期は、本パネルのテーマ「危機と革新の金融史」にふさわしく、かつ銀行監督・検査の進化を考察する上で重要と考えられるからである。

本報告の中心部分となるのは、③1920年反動恐慌～昭和恐慌期である。断続的な金融危機の中で、この時期に進展したプルーデンス監督の体系化を概観する。その上で、北海道～九州に至る25行以上の検査史料を検討した結果をもとに、大蔵省銀行検査の進化の内容を明らかにしたい。

### <主要参照論文>

邊英治（2003）「大蔵省検査体制の形成とその実態—1920年代を中心として—」『金融経済研究』第20号，2003年10月。

邊英治（2006）「プルーデンス規制と不良債権問題—1915～45年，日本の銀行規制の分析—」東京大学博士論文，2006年1月。

邊英治（2009）「草創期における第十五国立銀行と大蔵省銀行検査—1877～82年—」『地方金融史研究』第40号，2009年4月刊行予定。